



紅赤の
山田 いち

川越いも友の会理事 井上 浩

1. 紅赤の発見者は女性

関東で青果市場用のサツマイモといえば、明治の後期から紅赤（ベニアカ）に決まっていた。さいきんでこそ紅高系（ベニコウケイ）、紅小町（ベニコマチ）、そして紅東（ベニアズマ）などのすぐれた品種が続々と開発され、紅赤と肩を並べるようになったが、それまでの数十年間は紅赤だけの天下だった。

この紅赤を世に出したのは、一人の主婦で国や県などの育種研究機関でもなければ、種苗会社でもなかった。

紅赤が発見されたのは東京近郊の大宮台地上であったが、ここの農家は早くから東京向けの野菜を作っていた。そしてサツマイモも、その一つだった。自家用作物と違って、売るための作物作りには気をを使う。農家は常に他の家のものや、他の村のよりもいいものを作ろうと心掛けている。

紅赤の発見者、山田いちとは幕末の文久3年（1863）、大宮台地上の畑作村、針ヶ谷の山田兼吉、げん夫妻の長女として生まれた。長じて婿養子を取り明治16年、22歳で長男を生んでいる。紅赤の発見はそれから15年後の、明治31年のことだった。同年秋のこと、いちはいも掘りをしていた。品種は2年前から作りはじめた「ハツ房」（ヤツブサ）だった。このイモの肌は淡い紅色だったが、中にそれとは明らかに違う濃い紅色のイモがあった。

注意深いいちがそれを取り分け、その1本をふかしてみると、味も香りもハツ房よりはるかに良かった。そこでいちはこの鮮紅色のイモをふやしてみたくなり、残りのイモを種イモとして保存した。幸い、そういうイモが7株もあったという。

いちがその翌年、そのイモの苗を植えてみると、やはり肌色が鮮紅色のイモになり、新種であることがはっきりした。紅赤発見から2年後の秋、いち少量の紅赤を近くの八百屋、現埼玉県蕨市の八百太郎宅へ持ち込んだ。試しに売ってもらおうとしたわけだが、相手はイモの皮の色を気味悪がり、なかなか預かろうとしなかったという。

紅赤が東京に出たのは、それからさらに2年後、つまり発見から4年後の秋のことだった。駒込市場の甘藷問屋、「松鉄」に出したところ、無類のイモと激賞された。松鉄の主人は紅赤を高値で買い上げるとともに、出入りの甘藷農家に、これからはこういうイモをどんどんふやすように奨めた。いちの親類で、家も近所だった吉岡三喜蔵は、こうした刺激をもっとも強く受けた人だった。

2. 紅赤の普及家、吉岡三喜蔵

この吉岡三喜蔵は事業家だった。紅赤が有望なことが分かると、いちから譲り受けた種イモをもとに、種イモと苗の増産にすべてを投入した。最初は地元に、次いで関東諸県へ、さらには全国へと売りまくった。

ただ三喜蔵は特別相場を避け、普通相場で売り通した。当時の紅赤の人気からみて、いくらでも高くできたはずなのに、それをしないというのが三喜蔵の方針だった。そのため注文が殺到。かえって利益も十分出たという。三喜蔵は金が入ると畑を買い増し、傭人

をふやして一層紅赤の普及に努めた。紅赤が関東を中心に、またたくまに普及、「西の源氏、東の紅赤」としたわれるまでになった。

3. 川越イモの変化

その川越イモは、「赤ヅル」と「青ヅル」の2種類だった。赤ヅルは味も香りもすばらしかったが、作りにくく、収量も少なかった。ただ値段は良かった。一方、青ヅルは品質的には赤ヅルよりやや落ちたが、作りやすく収量も多かった。「赤沢式甘藷栽培法」の提唱者として有名だった川越の甘藷先生、赤沢仁兵衛が明治期を通して研究していたのは、この赤ヅルの増収方法だった。ところがその明治後期に、いいかえれば赤沢式がちょうど確立した頃、思いもよらぬところで赤ヅル以上のイモが出現したのだ。

実は山田いちも、もともとは青ヅル専門だった。ただ彼女はそれに満足できず、あれこれ、別のいいものを探していた。そして知ったのがハツ房だったわけだ。

ハツ房はすでに近所で作っていた人がいたので種イモもすぐ分けてもらうことができた。青ヅルをハツ房に切り変えたのは明治29年のことというから、紅赤はその切り換え直後に発見されたことになる。肌の色が美しく、形も紡錘型で美しい紅赤は、まずふかしイモとして利用された。ただ生産量がふえ、価格も下がってくると、焼芋屋でもどんどん使いだした。こうして赤ヅルも青ヅルも消え、大正期の川越イモは紅赤一色になった。そして今なお川越イモといえば紅赤だ。

4. 第1回富民賞受賞

紅赤は今なお「サツマイモの女王」とうたわれている逸品だ。そしてすでに100年近いキャリアを誇っている。

時の埼玉県北足立郡の産業係長、渋谷周蔵は、地域での農業指導者で、大正15年に『昆陽先生甘藷の由来』という本をまとめ、埼玉県甘藷商同業組合から発行した。甘藷先生、青木昆陽の事蹟をまとめたものだが、それだけでなく最新のサツマイモ栽培技術や農事試験場の調査報告なども載せている。そしてさらに「甘藷紅赤の発見と育成の由来」という一文を加えている。2ページとちょっとという短文だが、山田いちと吉岡三喜蔵の功績をたたえ、「とにかく隠れた功労者を放っておくのは殖産振興上、遺憾の極みである」と結んでいる。

それだけに渋谷係長は、ことあるごとに紅赤の発見者山田いちの功績を識者に説いて回っていた。それがやがて富民賞、それも第1回の受賞につながっていったようだ。

農村の振興を願う毎日新聞(東京日日新聞)社長、本山彦一は昭和2年、財団法人富民協会を創立した。その事業の一つに、農事功労者の表彰があり、毎年全国から功労者を選んで表彰した。昭和6年から始まり、第1回受賞者は5人、その中に山田いちもいた。晴れがましい授賞式は、昭和6年10月18日、伝達式の形で行なわれた。ときに、いち は69歳、紅赤の発見から30年以上も後のことだった。

山田いち は昭和13年、76歳で亡くなった。

いも類振興情報 第25号

平成2年10月15日発行

発行所	財団法人 いも類振興会
	東京都港区赤坂6-10-41
	ウィップ赤坂303号室
	電話 03-588-1040
	振替・東京 3-110152
印刷所	交通印刷株式会社